

## 平成21年度 病害虫発生予察注意報 第1号

平成22年1月27日  
栃木県農業環境指導センター

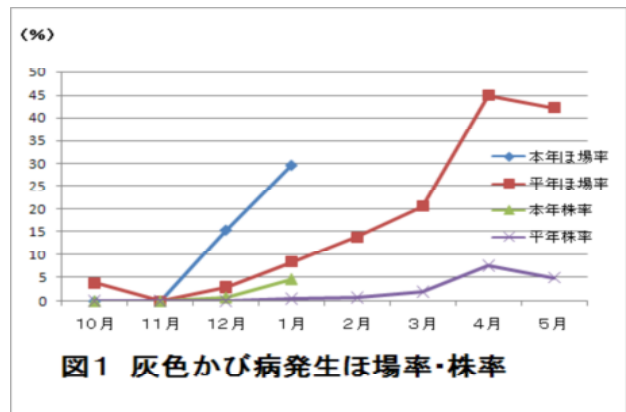
### 作物名 : トマト(越冬・冬春作型) 病害虫名 : 灰色かび病

- 1 発生予想 発生量 多い
- 2 発生地域 県内全域
- 3 注意報発表の根拠

- (1) 1月の巡回調査におけるトマト灰色かび病の発生状況は、発生ほ場率29.6%(平成8.4%)、発生株率4.6%(平成0.5%)と過去10年間で最も高い数値であり、特に越冬作型で多発している(表1)。
- (2) 本格的にサイド換気ができる時期までは、ハウス内は多湿となりやすいため、灰色かび病菌の増殖に好適な環境にあり、今後も発生が増加する恐れがある(図1)。

表1 越冬・冬春トマトにおける灰色かび病の発生状況

調査時期	発生ほ場率(%)		発生株率(%)	
	本年	平成	本年	平成
10月	0.0	3.8	0.0	0.1
11月	0.0	0.0	0.0	0.0
12月	15.4	3.0	0.8	0.1
1月	29.6	8.4	4.6	0.5



#### 4 防除対策

- (1) 灰色かび病の発生しやすい条件は15~23℃と比較的低温で、多湿条件であることから、ハウス内の温度および湿度管理に注意する。特に曇雨天日が続く場合は、循環扇、暖房機を稼働し、ハウス内の湿度を下げ、植物体表面の結露を除去する。
  - (2) 疫病などによる枯死葉、花びら、発病葉、発病果をすみやかに除去し、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
  - (3) ポトキラー水和剤のダクト内投入を行う場合、低温条件下では効果が現れにくいので、10℃以上の温度を確保するよう努める。また本剤は予防剤であるため、発病後は化学農薬と組み合わせた防除を実施する。
  - (4) 曇雨天時は液剤の使用を控え、くん煙剤等を使用すると過湿防止に有効である。
  - (5) 同一系統薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。
- トマト灰色かび病に登録のある農薬例(平成22年1月25日現在の登録状況)

系統名	薬剤名	希釈倍率等	使用時期/使用回数
ベンズイミダゾール系 +ジエトフェナゾール	ゲッター水和剤	1,000倍~1,500倍	収穫前日まで/5回以内
アズリルリミジン系	フルピカフロアブル	2,000倍~3,000倍	収穫前日まで/4回以内
抗生物質	ホリオリソナル水溶剤	2,500倍~5,000倍	収穫前日まで/3回以内
その他	カンタストライロアブル	1,000倍~1,500倍	収穫前日まで/3回以内
	ジヤストミート顆粒水和剤	2,000倍~3,000倍	収穫前日まで/3回以内

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

# 平成22年度 病害虫発生予察注意報 第1号

平成22年6月25日  
栃木県農業環境指導センター

作物名 : なし  
病害虫名 : 黒星病

- 1 発生予想 発生量 多い
- 2 発生地域 県内全域
- 3 注意報発表の根拠

- (1) 6月上中旬の巡回調査の結果、発生ほ場率は60.0%（平成27.0%）、発病葉率は0.6%（平成0.5%）で、平年に比べ県内全域で黒星病の発生ほ場が多くみられた（図1、2、3）。
- (2) 病害虫防除員の報告によると、一部で多発ほ場があった。
- (3) 気象予報によると、向こう1ヶ月は平年と同様に曇りや雨が多い見込みで、今後の発生増加が予想される。

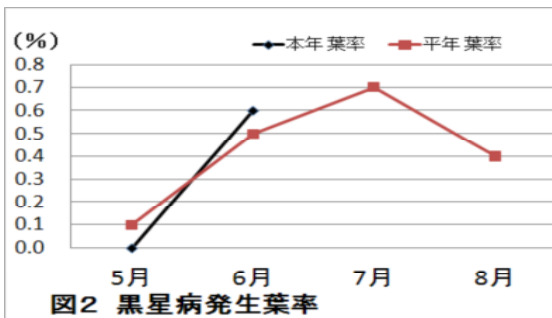
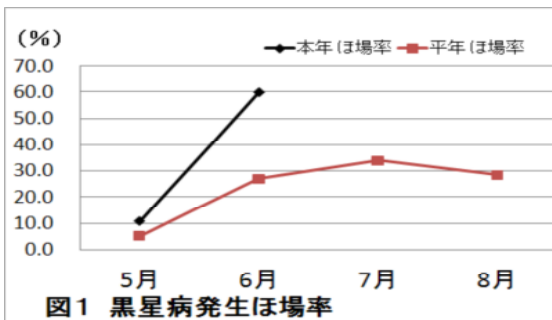


図3 黒星病の発生状況

発生葉率 (%)	0	0.1~5	5.1~15	15.1以上
記号	x			

## 4 防除対策

- (1) 発病した果そう基部、葉、果実は二次伝染源になるため、見つけ次第ほ場外に持ち出し、土中に埋める等適正に処分する。
- (2) 幸水は果実肥大後期の7月上旬から黒星病の感受性が高くなるので、降雨が頻繁で果実での発生が予想される場合には、わずかの晴れ間、または小雨でも薬剤散布を実施する。
- (3) 現在、葉に発病が多いほ場では、治療効果の期待できるストロビードライフロアブル、ベルコートフロアブル等を6月下旬から7月中旬に追加して散布する(表1)。
- (4) 黒星病は感染後、発病までに15日程度の潜伏期間があるため、現在発病した葉や果実が見つからなくても、常になしを観察し、発生があった場合は初期防除を速やかに行う。

表1 なし黒星病に登録のある主な防除薬剤(6月下旬~7月中旬)

薬剤名	希釈倍数	使用時期 / 使用回数
ストロビードライフロアブル	3,000倍	収穫前日まで / 3回以内
ナリアWDG	2,000倍	収穫前日まで / 3回以内
ベルコートフロアブル	1,500倍	収穫14日前まで / 4回以内
オキシラン水和剤	500~600倍	収穫3日前まで / 9回以内
キノンドーフロアブル	1,000倍	収穫3日前まで / 9回以内

注1) オキシラン水和剤とキノンドーフロアブルは有効成分として有機銅を含むため両薬剤の使用回数はあわせて9回以内とする。

注2) 薬剤散布に当たっては周囲への飛散(ドリフト)に十分注意する。

注3) 平成22年6月23日現在の農林水産消費安全技術センターの農薬登録情報に基づいて作成している。

詳しくは、農業環境指導センターまでお問い合わせください。

TEL 028-626-3086  
http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/

# 平成22年度 病害虫発生予察注意報 第2号

平成22年8月23日  
栃木県農業環境指導センター

## 作物名 : いちご 病害虫名 : 炭疽病

- 1 発生予想 発生量 多い
- 2 発生地域 県内全域
- 3 注意報発表の根拠
  - (1) 8月上中旬の巡回調査の結果、発生ほ場率は20.3% (平年4.1%)、発病株率は2.0% (平年0.1%)で、過去10年間で最も高い(図1、表1)。
  - (2) 病害虫防除員の報告によると、一部でほとんどの苗に発生し苗不足となったり、全ての苗を廃棄したほ場もあった。
  - (3) 平成22年度8月20日付け気象庁1か月予報によると、向こう1か月の平均気温は高い見込み。そのため今後の発生増加が予想される。

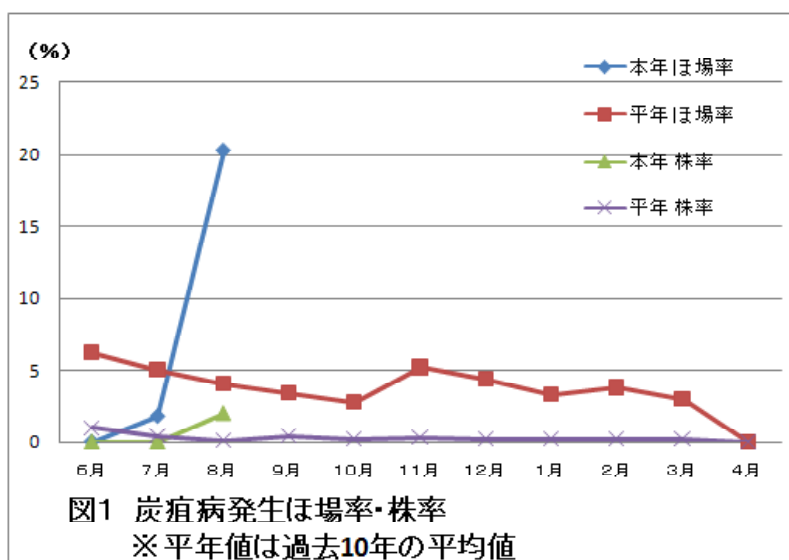


表1 炭疽病発生ほ場率・株率

	ほ場率(%)	株率(%)
H22.8	20.3	2.0
H21.8	4.2	0.0
H20.8	0.0	0.0
H19.8	0.0	0.0
H18.8	2.4	0.1
H17.8	2.3	0.0
H16.8	11.1	0.3
H15.8	0.0	0.0
H14.8	2.3	0.2
H13.8	0.0	0.0
H12.8	19.0	-

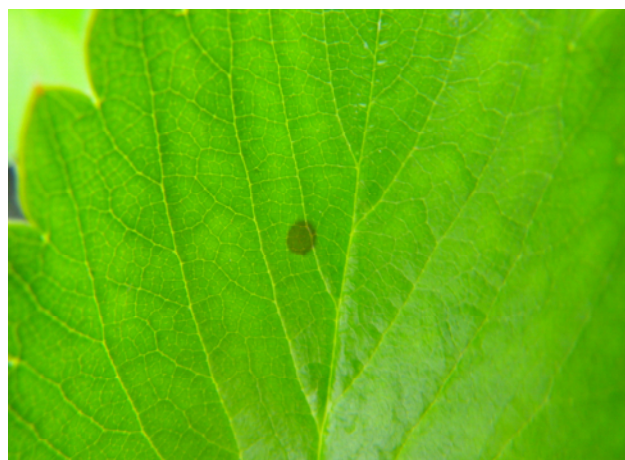


写真1 汚斑状の病徴



写真2 葉柄の病徴

#### 4 防除対策

- (1) 発病株（写真 1、2）は、感染源となるので、周辺の株も含めて取り除き、肥料袋等に詰め、空気を排出口をしっかりと閉じて、日当たりのよい野外に放置し、嫌氣的発酵処理を行う（圃場やその周辺に放置しない）。
- (2) イチゴ炭疽病菌は水滴の飛散等で伝染するので、できるだけ水の跳ね返りがないようなかん水を行う。
- (3) ポットの間隔を広げるなどして風通しを良くするとともに、茎葉の濡れ時間が長くならないよう、かん水はできるだけ晴天日の午前中に行い、曇雨天日及び夕方のかん水を控える。
- (4) 症状が出てからの防除は困難なので、発生前から定期的に予防散布を行う（表2）。
- (5) 気温が高い時期は、防除の間隔が長くなると感染の危険性が高まるので、7～10日間隔で防除する。
- (6) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

表2 イチゴ炭疽病に登録のある主な防除薬剤<sup>注1</sup>

薬 剤 名	希 釈 倍 数	使用時期 / 使用回数
E B I 剤		
バイコラル水和剤	2, 500倍	育苗期 / 3回以内
サンリット水和剤	2, 000倍	収穫前日まで / 3回以内
ゲアニジン系		
ベルコート水和剤	1, 000倍	育苗期(定植前) / 5回以内
ベンゾイミダゾール系		
ゲッター水和剤	1, 000倍	定植前日まで / 3回以内
有機銅剤		
オキシンドー水和剤 80	1, 000倍	育苗期 / 3回以内 <sup>注2</sup>
キノンドーフロアブル	500～800倍	育苗期 / 3回以内 <sup>注2</sup>
有機塩素系		
オーソサイド水和剤 80	800倍	収穫30日前まで / 3回以内
その他		
デランフロアブル	1, 000倍	育苗期 / 2回以内
微生物農薬		
タフパール <sup>注3</sup>	2, 000～4, 000倍	育苗期～収穫前日まで / -

注1) 平成22年8月19日現在の農林水産消費安全技術センターの農薬登録情報に基づいて作成している。

注2) オキシンドー水和剤80とキノンドーフロアブルの有効成分はいずれも有機銅であるため、両薬剤の使用回数は合わせて3回以内とする。

注3) タフパールは微生物農薬であるため、他の殺菌剤との混用を避ける。

詳しくは、農業環境指導センターまでお問い合わせください。

TEL 028 - 626 - 3086

<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>

# 平成 22 年度 病害虫発生予察注意報 第 3 号

平成 22 年 9 月 22 日  
栃木県農業環境指導センター

**作物名 : 野菜類、花き類、だいず**  
**病害虫名 : ハスモンヨトウ**

- 1 発生量 多い
- 2 発生地域 県内全域
- 3 注意報発表の根拠
  - (1) 9 月上～中旬に行った調査では、幼虫がだいず、キャベツ、きゅうり、ねぎ、いちご、なすで多発していた(表 1)。
  - (2) 県内 6 地点に設置したフェロモントラップにおける 9 月第 2 半旬(6～10 日)の誘殺数(雄成虫)は、全県平均で平年値に比べ 3.3 倍と多く、最も高い地点で 7.4 倍、最も低い地点で 0.9 倍であった。
  - (3) 多発の原因は夏季に気温が高く、雨が少なかったためと考えられ、気象予報(9 月 17 日発表)によると、向こう 1 カ月の平均気温は平年より高い見込みで、今後も増殖に適した気象である。

表 1 . ハスモンヨトウ幼虫の発生状況

調査品目	発生ほ場率(%)		発生株率(%) <sup>1)</sup>		調査日・ほ場数
	H 2 2	平年値 <sup>2)</sup>	H 2 2	平年値 <sup>2)</sup>	
だいず	83.3	39.2			9月13～14日・30ほ場
キャベツ	71.4	17.5			9月 8～ 9日・ 7ほ場
きゅうり	28.6	10.9	2.7	0.2	9月 7～10日・10ほ場
ねぎ	23.5	0.0	0.9	0.0	9月 6～ 9日・17ほ場
いちご	23.3	11.7	1.5	0.9	9月 6～10日・60ほ場
なす	22.2	12.2	2.9	0.3	9月 6～10日・ 9ほ場

- 1) 各ほ場で、いちごでは 25 株、なす、ねぎでは 50 株、きゅうりでは 100 葉(25 株)で見取り調査を実施。なお、キャベツ、だいずでは発生株率の調査はしていない。
- 2) 平年値は過去 10 年の平均値。

#### 4 防除対策

- (1) 野菜類・花き類とも育苗期間や定植直後に加害されると被害が大きいため、定期的にほ場をよく観察して早期発見に努め、発生を確認した卵塊や分散前の幼虫は寄生葉とともに摘み取り処分する。
- (2) 発生が見られた場合、薬剤を葉裏によくかかるよう丁寧に散布する。
- (3) 幼虫は齢期が進むと薬剤の効果が低下するので、発生初期に薬剤を散布する。
- (4) 施設栽培では、開口部に防虫ネット等を張り、成・幼虫の侵入を防ぐ。また、葉の裏だけでなく、鉄骨パイプ等の資材に産卵することもあるため、卵塊を発見した場合には、つぶして除去する。
- (5) ほ場周辺の雑草は発生源となるため、雑草管理を徹底する。

詳しくは、農業環境指導センターまでお問い合わせください。

TEL 028 - 626 - 3086

<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>